

ご相談は？
お決まりですか？

学園内で執事&メイド喫茶はじめました

伊藤クミコ／著
ハモンド華麗／イラスト

とだこはる 兔田小陽

中一。人の気持ちに敏感で、困っている人を見るとほうっておけない優しい心の持ち主。怒ることが苦手で、どうやって感情を伝えればいいかわからなくてなやむことも。入学式からずっと仲が良かった友だちから仲間外れにされたことがきっかけで、喫茶部に入部することに。



にしおおしれお 西大路怜王

中一。超イケメンで「なやみを聞かせてくれるひと」には物腰柔らか。喫茶部をはじめた張本人。お金が大好きで、お金の話になると饒舌に。銭ゲバなのにも、喫茶部を立ち上げたのにも、なにか「ツケ」があるようで……っ





しらね
白根 ふゆ

59ういち こはる かおだ くわ
中一。小陽のクラスメイト。きれいな顔立ちに加
え、無表情なことから、周囲に「お人形のような
美少女」と言われている。空気が読めず、思った
ことをそのまま口に出してしまっ、人の輪に入
れないことがコンプレックス。

むらおか あきの
村岡 空乃

59ういち こはる なか よ とも
中一。小陽のクラスメイトで仲が良かった友だち
のうちのひとり。クラス内で、グループを転々と
していたのにはワケがあったようで……？



すやま さゆみ
楽山 早弓

59ういち こはる なか よ
中一。小陽のクラスメイトで仲が良かった
友だちのうちのひとり。小陽とは入
学式の時からなかよしだったのに、あ
る日突然小陽に冷たくなって……？



フレディ

インコのようなオウムのような不思議
な雰囲気を持つ小鳥。怜王に飼われて
いて、なぜか人をつついてくる。



もくじ 目次

1. わたしがメイドになった理由 005
2. 学園内に、執事……!?
がくえんない しつじ
3. お支払いは、労働で 036
しはら ろうどう
4. 白根ふゆ、ご来店 045
しらね らいてん
5. 新入部員 062
しんにゅうぶいん
6. 難易度高めのお客様 080
なんいどたか きやくさま
7. 見えてきた、新しい景色 096
み あたり けしき
8. 退部届 116
たいぶとどけ
9. 西大路くんが考えた対決方法 127
にしおおじ かんが たいけつほうほう
10. 一点のくもり 140
いってん
11. 不思議な力 154
ふしぎ ちから
12. 平穏な日々 172
へいおん ひび
13. 西大路家の秘密 179
にしおおじけ ひみつ



1 わたしがメイドになった理由

あなたには、今、なやんでいることがありますか？

家族のこと、友だち関係、恋愛に、将来のことや、ほかにもどんなことでも。

もし、ひとりで抱え込んでいることがあるのなら、私立中野原学園の中庭をたずねてみて。

银杏やカエデに彩られた遊歩道を奥へ奥へと進んでいくと、第三校舎のそばに、植物園のよう

なガラス張りの、かわいらしい円柱形の建物があるんだ。

その古い温室のドアを開けるとね——

「いらっしやいませ。ご相談はお決まりですか？」

——って、ステキな執事さんが出迎えてくれるはずだよ。

わたしは、この学園の中等部の一年生で、兔田小陽。

この古い温室を改装したカフェテリアで、メイドとしてお客様にお給仕したり、おなやみを解

決するお手伝いをしたりしているんだ。
どうしてわたしがこの学園でメイドをすることになったのか、これからお話しするね。



平穩そのものだったわたしの生活に異変がおきたのは、入学してから半年ほどがすぎた、十月の初週のことだった。

— 限終了のチャイムが鳴った瞬間、なかよしの早弓ちゃん—— 巢山早弓ちゃんが立ち上がり、ろうか側にある、村岡空乃ちゃんの席に向かったんだ。

……あれっ？ 早弓ちゃん、いつもなら、わたしの席に来るのに。

そう思って、ちよっとモヤモヤして……でも、すぐに首を振って、その考えを振り払った。いやいや。もともと約束していたわけじゃないしね、って。

早弓ちゃんとは、入学してすぐに仲良くなった。

入学式のとき、待機列で隣だった早弓ちゃんが話しかけてくれたんだ。

男の子のアイドルが大好きで、活字が苦手な早弓ちゃんと、アイドルにはあまり興味がなくて、本を読むのが大好きなわたしでは、ちよっと、いやかなり、趣味はちがったけど……。わ

たしたちは不思議とすぐに打ち解けて、昔からの友だちみたいに話すことができたんだ。

小学校のときの友だちは学区内の公立中学校に進学してしまい、ひとりこの学校に進学したわ

たしは「友だち、できるかな……」って不安だったから、とてもホッとしたのをおぼえている。

どうやら、早弓ちゃんも似たような境遇だったみたいで、

「ねねっ。あたしたち、仲良くなれそうじゃない？ きっと席も近いだろうし、よろしくね！」

って、言ってくれた。

だけど、ふたを開けてみたら、教室でのわたしの席は窓際から二列目の一番後ろで、早弓ちゃん

は隣の列の一番前で。

早弓ちゃんは、「どーしてよー……」ってなげいていて、思わず笑ってしまったっけ。

でも休み時間になるたびに、早弓ちゃんは「小陽ーっ」って、わたしの席に駆けってきてくれ

た。

だから、なんとなく、それがずっと続くものだと思ってしまうていたみたいだ。

わたしは気を取り直して席を立ち、空乃ちゃんの席に向かった。

「——あははっ、やたあ〜」

早弓ちゃんと空乃ちゃんは、ふたりで楽しそうに話をしていた。

「楽しそうだね、なんの話？」

声を掛けると、早弓ちゃんが、ちらっとわたしを見た。

目が合った瞬間、ドキツとする。

早弓ちゃんの瞳が、今までに見たことがないような、冷たい色をして見えたから。

「あ……べつに？ たいした話じゃないよ」

そして、早弓ちゃんはすぐに、ふいっと目をそらしてしまった。

……えっ、どうしたんだろう。わたし、なにかしちやったかな？

なんだかいやなドキドキを感じながら、今度は空乃ちゃんのほうを見る。

けれど、目は合わなかった。わたしの声なんて、聞こえなかったみたいにな。

空乃ちゃんとは、こうして一緒に過ごすようになってから、じつはまた一か月ほどだ。

最初の数日こそぎこちないやり取りもあったけれど、最近はだいぶ親しくなって、よく「こはる、こはる」って、甘えるような声で呼んでくれていたのに……。

とまどうわたしの目の前で、空乃ちゃんが口を開いた。

「そうだ。さゆ、昨日公開された『南風』のMV見た!？」

「見た見た! a y a t a、ヤバいくらいカッコよかったあーん!」

とたんに、早弓ちゃんの顔が、パアッと明るくなる。

アイドルグループ「南風」は、早弓ちゃんが今一番推しているグループなのだ。

「あ、それ、わたしも見たよ」

わたしは南風のファンじゃないけど、早弓ちゃんからいっぱい話を聞いているうちに、少し興味がでてきたんだよね。それで昨日も、新着で見つけた「南風」のMVを見ていたんだ。

……ふふ、早弓ちゃん、「えっ、小陽も見てくれたの!？」なんて、よろこんでくれるかも?」

そんな淡い期待は、ふたりの興味なさげな「ふっん」に、かき消された。

わたしはちょっと動揺したけれど、それをかくすためにあえてテンションを上げて続ける。

「あの曲ってさ、メンバーのだれかが今度出るドラマの主題歌なんだってね? えっと……だれだっけ?」

「いいよ。興味もないのに、無理に話に加わろうとしないで」

早弓ちゃんが、吐き捨てるように言った。

「えっ……」

どうして、そんな言い方——。

おどろきとシヨックで、わたしはかたまってしまっ。

「それよりさー、今度、Kyoyaが時代劇の映画に出るんだって」

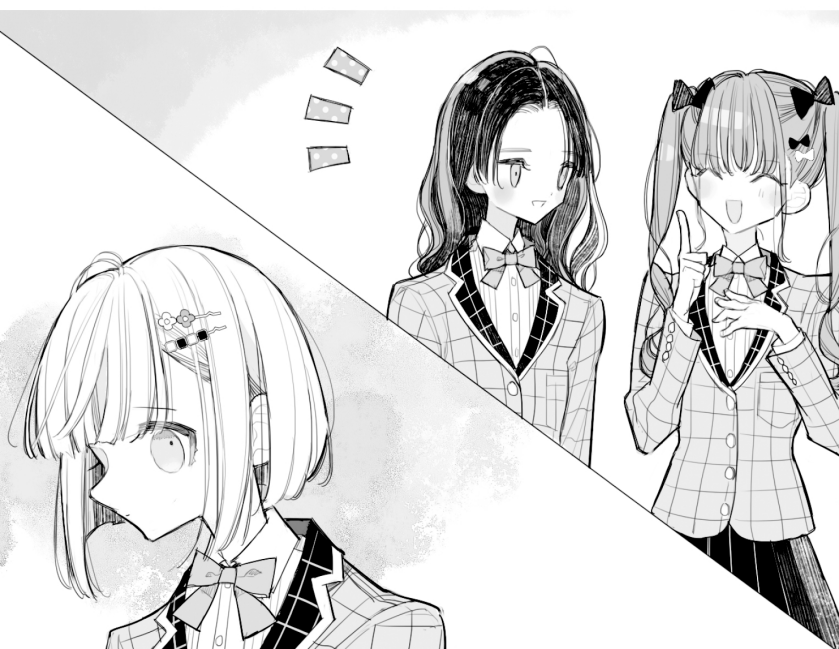
「えーっ、そうなんだ！ ってことは、舞台挨拶とかもあるよねっ？」

「ありそう！ わたしチケット応募するから、当たったら、さゆ一緒に行くよっ」

「行く！ あたし、その日に地球が爆発しても行くー！」

たまったままのわたしをのぞいて、ふたりはキヤッキヤと盛り上がりはじめた。

……あー、これは、たぶん意図的にハブられてるなあ。



そう察してはいるものの、どうしていいかわからなくなってしまっ

わたしは休み時間が終わるまで、あいまいな笑みを浮かべてその場にたたずんでいたんだ。



……はあ。

放課後。わたしはためいきをつきながら、とぼとぼと学園の中庭を歩いていた。

本当は、早く家に帰りたい……けど、こんな落ち込んだ顔を見せたら、きっと両親をすごく心配させてしまう……。

そう思うと、わたしの足は校門ではなく、学園の奥へ奥へと向かっていく。

——結局、早弓ちゃんたちとはろくに会話もないまま、一日が終わってしまった。

なんとかふたりとの関係を取り戻したくて、二限目以降の休み時間も、お昼休みも、がんばっていろいろ話を振ってみたんだけど、ね。

早弓ちゃんはそっけない返事しかしてくれなかったし、空乃ちゃんにいたっては……。

「あー、なんか、どっかから声が聞こえる気がするけど、わたしつかれてんのかなー」
なんて言^いって、あからさまにわたしを無視^{むし}した。

空乃^{あきの}ちゃん、もしかして……この前^{まえ}、わたしにしたのと同じ^{おな}ような話を、早弓^{さゆみ}ちゃんにしたの
かな。

考え^{かんが}たくないことだったけど、つい、考え^{かんが}てしまっつ。

じつは先週^{せんしゅう}、空乃^{あきの}ちゃんとふたりになったとき、こんな話を聞^きかされたんだ。

『早弓^{さゆみ}ちゃんがわたしの悪口^{わるくち}を言^いってる』って。

「あのさ……これ、言^いおうかどうかまよったんだけど、こはるのために言^いうね。さゆがね、わた
しに、こはるの悪口^{わるくち}言^いってきたの」

顔^{かお}をしかめて、心底^{しんぞこ}、早弓^{さゆみ}ちゃんを軽蔑^{けいべつ}しているような口^{くち}ぶりだ。

「たれにでもいい顔^{かお}するとか、いい人^{ひと}ぶってるとか。だから信用^{しんよう}できないとか。ひどいよね」
聞^きいた瞬間^{しゅんかん}、わたしの心臓^{しんぞう}は刃物^{はなもの}で一突き^{ひとつき}されたみたいだった。

シヨックが顔^{かお}に出^でたんだらう、空乃^{あきの}ちゃんは心配^{しんぱい}そうにわたしをのぞき込^こ込む。

「だいじょうぶ？ じはぬ」

「あ……だいじょうぶだよ、ごめん」

「うん。わかるよ、シヨックだよね。わたしだって、聞いたときびっくりにしたもん」
同情するように言われて、わたしはうなずいた。

「う、うん。わたし、早弓ちゃんがわたしのことをそんなふうに思ってるかも、なんて、今まで一度も……本当に、一度も、考えたことなくて」

わたしはそう口に出してみても、ふと、「そうだよ。そんなこと、考えられない」と思った。

早弓ちゃんと友だちになって、まだ半年足らずだけど……。

それでも、わかることはある。

早弓ちゃんは、基本的にうそがつかない子だ。

うそをつかない、のではなく、つかない。考えていることがすべてに表情に出るのだ。

それに、早弓ちゃんの性格なら、なにかあればわたしに直接言ってくれるような気がする。

「……ねえ、空乃ちゃん。今の話、本当？」

わたしがたずねたとたんに、空乃ちゃんの目に、怒りとあせりのようなものが浮かんだ。

「え、なに？ わたしがうそをついてるっていつの？」
「こはるのなを思っただけで教えてあげたの」

「……」

その瞬間、わたしは直感的に思った。

——うそだ。

この、空乃ちゃんの話こそが、うそなんだ、って。

だけど……どうして？

どうして空乃ちゃんは、わたしを傷つけるようなうそをつくんだろう？

数秒の間に、頭をフル回転させた。考えて、考えて……そして思い当たった。

もしかして……、不安、だから……？

入学式の直後、クラスにいくつかのグループができたんだけど、空乃ちゃんもそのうちのひとつに入っていたんだ。

でも、しばらくしてふと気づいたら、ちがうグループに入っていた。

それからしばらくすると、また、ちがうグループに入っていた。

それを何度か繰り返し、夏休みがあげた二期には、ひとりになっていったんだ。

どうしてそうなってしまったのか……グループの雰囲気と合わなかったのか、たれかともめてしまったのか、くわしい理由はわからない。けれど、元気をなくし、うなだれるようにぼつんと

席に座っていた空乃ちゃんのことを、ほうっておけなくなってしまつて。

それで、わたしは早弓ちゃんにたずねたんだ。

「空乃ちゃんのことを、お昼にさそつてもいいかな?」つて。

早弓ちゃんは、「小陽がそつしたいなら、いいよ」つて、受け入れてくれた。

でも正直なところ……早弓ちゃんは、あんまり気が乗らないみたいだつたんだよね。

というのも、早弓ちゃんは以前からよく、「あたし、こんなに気が合う友だちができたの、小陽が初めて! 小陽とふたりでいるの楽しすぎて、ぶっちゃけほかに友だちいらなにかも〜」なんて言つていたんだ。

実際に、早弓ちゃんはわたし以外の子と話すときに、ある程度一線を引いてつき合っている感じがあつて。そして早弓ちゃんも、わたしにそれを求めている雰囲気があつた。

だからわたしは、そんな早弓ちゃんがいやがらずにわたしの提案を受け入れてくれたことに、感謝しなかつたんだ。だけど……。

当の空乃ちゃんからしたら、早弓ちゃん存在はこわいものだったのかもしれない。

どんなにかくしていても、本当は乗り気じゃない気持ち、ちよつとだけ顔に出てしまつていた早弓ちゃんのこと、こわくて、不安になつちやつたのかもしれない。

自分を排除しようとするんじゃないかって。

だったら、その前に早弓ちゃんのことを排除したいって、思ってしまったのかもしれない。だとしたら——。

「……あのね、空乃ちゃん」

わたしは、伝えたかった。

「わたしと早弓ちゃんを仲たがいさせなくたって、空乃ちゃんのこと、のけ者にしたりしないよ。だから、だいじょうぶだよ」って。

ただけど……、どうやって言えば、それを伝えられるんだろう。

考えても、考えても、わからなくて。

「……今日の話は、聞かなかったことにするね。早弓ちゃんにも言わないから、安心してね」結局、わたしはそれだけ言った。

すると空乃ちゃんは、ひゅっと息をのみ込んだ。

そして、真っ青になってたまりこくってしまった。

え、あれっ？ どうしよう。もしかして、突き放したみたいに聞こえちゃったかな。

あせったわたしは、あわてて話題を変えろ。

「あ、あーっと、そういえば、この前空乃ちゃんがかわいって言ってたネコちゃん、なんていう子だっけ？ 昨日動画見ようと思ったたら、名前忘れちゃっててー」

空乃ちゃんを怒ったり、拒絶したりしたわけではないのだという気持ちを込めて、つとめて明るい声を出した。すると、空乃ちゃんはぎこちない表情ながらも、話に乗っかってきてくれて……。

だから、わかってくれたんだと思っていた。

まさか、空乃ちゃんが、早稲ちゃんに同じことをするかもしれないなんて、思わなかったんだ。

……。

いろいろ考えながら歩いていたら、中庭の最奥にある小さな噴水のところまで来ていた。

まわりにバラの生垣があって、校舎や散策路から見えにくくなっているため、カッブルや告白の場所としてひそかに人気のスポットだ。

けれど、今は幸いと言おうか言うまいか、だれもない。

ホッと息をついたとたんに、胃のあたりに痛みが走った。

わたしは立ち止まり、両手でおなかを押さえる。

「おなか、痛……」

つぶやくと、なんだか涙が込み上げてきて、わたしはその場にしゃがみ込んだ。

——バサバサッ。

そのとき、小さな鳥の羽音とともに、肩に、かすかな重みを感じた。

「え……?」

顔を横に向けて、手のひらより少し大きいくらいのサイズの小鳥が乗っている。

小鳥は全体的に灰色で、顔まわりだけがクリームイエローっぽい色だ。

頭の上に、ぴょんっと飛び出たような羽があるのと、ほっぺたがオレンジ色をしているのが、

とてもかわいい。

「インコ? それとも、オウムかな?」

どこかから、まよい込んできたんだろうか。

とまどいながらながめていると、小鳥はおもむろに頭をそらし、肩にくちばしを突き刺した。

——ザシユツ。ザシユツ。

「えっ、なに!? いたっ、痛あっ!?」

——ザシユツザシユツ!

「やっ……やめてえ!」

思わず悲鳴をあげて、小鳥を追い払おうとする。

でも、小鳥は少し飛んだだけで、また、反対側の肩に舞い降りてくる。

「どうしてつつくの!? わたしはえさじゃないよ〜!」

わたしが半泣き状態であわてっていると、ふいに男の子の声がした。

「フレディ、来い!」

同時に、頭上にふつと影がさす。

小鳥が、バササツと羽音をたて、肩から飛び去った。

その姿を追うように顔を上げると、いつのまにか、目の前に——執事さんがいた。